



コムスジみ♀

## 1、2019モニタリング報告-2

昨年度はバックホーで6,700㎡もの面積の抜根作業を行いました。作業直後は植物がない裸地が一面に広がる状況になりました。**ひどく荒れた状態**に見え、自然破壊であるという意見もあります。インターネット上でも、ブルドーザーで均してしまったという批判がある一方で、自然再生の理想的な方法だという賛成意見もあり、賛否両論があることは承知しています。もちろん、葦毛湿原ではブルドーザーで地面を均すような乱暴なやり方はしていません。裸地化した現地を見て想像した見解だと思います。

葦毛湿原では複数の専門家や関係者が参加する「葦毛湿原保護意見交換会」を開催し、作業計画を立てて作業を行っています。重機を使う作業では、地層を細かく管理し、バックホーを使って土壌シードバンクの埋土種子を蒔き出し、最大限活用して大規模に湿地を再生するこれまでにない方法で行っているために誤解されているだけだと思います。

自然に対して人間がどこまで手を加えるべきかという点については、様々な意見があり定まった正解はないという状態だと思います。自然と人間との共生をどのように考えるかという考え方の違いが意見の相違という形で表れていると思います。自然と人間との共生関係については葦毛通信 No. 15 で自然と里山の関係について基本的な考え方を示しています。葦毛湿原では、「**もうこれ以上生物を絶滅させない**」ということを目標にし、そのために何を行うべきかということを考えながら作業を進めています。

昨年度はバックホーで6,700㎡を**初期化**しました。これから2～3年後には様々な植物が出現する大きな変化が見られると思います。

### 1) J地点西側

J地点とその西側は平成29年度に木を伐採し、経過は葦毛通信 No. 64・65・71 に掲載しています。南端部分で小さな湿地状になるところがあり、ミズギボウシやイヌノハナヒゲ、イグサの仲間が発芽しました。木道沿いは水分が多くヌマガヤの群落広がっていますが、その他の森になっていたところはやや乾燥しており、ほとんどがササの群落になりました。平成30年度にはバックホーで抜根作業を行いました。抜根後の状況は葦毛通信



抜根作業後（北から：2019年3月28日） 抜根後1年目（北から：2019年7月10日）



**伐採後1年目（北から：2018年9月16日） 抜根後1年目（北から：2019年7月10日）**

No. 77 に掲載しています。ササはできる限り根を除去し、画面奥から右手にかけては抜根した木の根やササの根を積み上げています（前頁左写真）。ここからはササやオオイヌタデ等の荒地の植物が大量に発芽し、積み上げた根や土が全く見えなくなっています。

J地点西側では木道沿い以外はやや乾燥しており、伐採後は一面のササ原になりました（上左写真）が、バックホーでササの根を丁寧に除去したので、現在はかなりササの勢いが抑えられています（上右写真）。

南側にあった小さな湿地も伐採ただけの状態では周囲はササに覆われていましたが、現在、湿地部分はイヌノハナヒゲの群落になり、イグサの仲間などがわずかに発芽しています（右下写真）。



**J地点西側の南側の湿地抜根前（北から：2018年9月16日）**



**J地点西側の南側の湿地抜根後（北から：2019年7月10日）**

## 2) Y地点北西側

Y地点は木を伐採してすぐに抜根しました。抜根後1年目はコウガイゼキショウの仲間が優勢になりました(葦毛通信 No. 70 参照)が、現在はイとホタルイの大きな群落になり、アブラガヤ、コガマ、ヤマイ等がわずかに見られます(右下写真)。

1年目に優勢だったコウガイゼキショウの仲間はほとんど見られなくなり、1年で主たる植物が大きく入れ替わりました。

他の地点でも、裸地化して最初に出てくるのは、水分がやや少ないところはマネキシングヤ、ケシングヤ等のシングヤの仲間が出現しますが、すぐに衰退してしまいます。水分が多いところはイグサやカヤツリグサの仲間が出現しますが、やはりすぐに他の植物に変化していくようです。

F地点の旧水田上段(葦毛通信 No. 17 参照)では、木道側の表土層を剥ぎ取って低くなり、わずかに冠水する水分の多い環境になると、イグサやカヤツリグサの仲間が出現しましたが、現在はほとんどがミゾソバの群落になっています。



Y地点北西側抜根後1年目(2018年9月23日)



Y地点北西側抜根後2年目(2019年7月10日)



O地点中央南側抜根後1年目(2018年7月2日) 抜根後2年目(2019年7月10日)

### 3) O地点

O地点南西隅の抜根後1年目の経過は葦毛通信No. 70に掲載しています。昨年同時期と比較すると(前頁下段の写真)2年目になり多くの植物が出現していることが分かります。2年目の中央から左側にかけてはイヌノハナヒゲが優勢になっており、その間から多くのトウカイコモウセンゴケが発芽しています。

O地点全体の1年目はマネキシングヤ、ケキシングヤがわずかに発芽し、イヌノハナヒゲが多く見られましたが、今年はイヌノハナヒゲが優勢になり、全体がイヌノハナヒゲの群落になっています。

トウカイコモウセンゴケはイヌノハナヒゲ群落の中にも見られますが、今後は日照が妨げられることにより衰退すると予想しています。50個体を単位として計測した概数では、少なくとも2,000個体以上になります。開花している個体は全体の80~90%とされます。昨年は夏の開花には間に合いませんでしたが、今年は多くの花を咲かせてくれました。トウカイコモウセンゴケは6~7月に咲く夏咲きと、9~10月に咲く秋咲きがあるようです。

食草であるイヌノハナヒゲ群落にはヒメヒカゲも訪れるようになりました。生息範囲を広げるものと思われます。



**O地点抜根後1年目(2018年9月23日)**



**O地点抜根後2年目(2019年7月10日)**



**O地点のトウカイコモウセンゴケ(2019年6月18日)**